



# 幼児の傳染病

醫學博士 青木醇一

疾病が人の年齢に大なる關係のあることは敢て云ふまでもない。小兒が大人に比して疾病に罹り易いこと又病氣に對して著しく抵抗の弱いことなどは誰でも知つてゐることである。又病氣の種類に就ても大人と小兒では著しく異なつてゐる、例へば瘧とか腦溢血とか云ふやうな病氣は壯年を過ぎた人にもみくる、反之麻疹、疫痢、百日咳などは常に小兒のみを犯す病氣である。又同じく小兒でも年齢によつて病氣の種類も多少異なり又病氣に罹る割合も著しく異なつてゐる。五、六歳の幼兒と八、九歳の兒童とは年齢の差は僅かに二、三年であるが病氣に對する關係は可なりちがつてゐる。例へば幼兒では消化器系統の病氣や呼吸器系統の病氣が可なり多いが學齡以後になるとこれが著しく減つて來る。又小兒特有の傳染病即ち麻疹、百日咳、デフテリー、疫痢、水痘、流行性耳下腺炎等の如きも學齡前の幼兒に多い。勿論學童にも決して少くはないが學齡以後は兒童の成長につれ年一年これ等傳染病に對する感受性が減じてくる。

近年我國では種々の傳染病が極めて多いのであるが殊に幼児に於て著しい。これは前述のやうに幼児は特に諸種の傳染病に對して強い感受性を持つてゐるからである。例へば疫痢の如きは三歳から五、六歳までの幼児のみが罹患する、そして乳兒には殆んどない、又學齡以後のものには極めて少い。又麻疹の如きも滿一年以後五、六年の幼児が特に感受性が強い。その他百日咳、ヂフテリー、水痘、流行性耳下腺炎等もほゞ同様である。それ故幼児をもつ家庭に於ては勿論幼稚園などでも幼児の保健上特にこれ等の小兒傳染病に對しては十分警戒して幼児をばこれ等の傳染病に感染させぬやうに心懸けなければならぬ。

傳染病の豫防上最も大切なことは各自が傳染病に對して正しい知識をもつことである。人々が傳染病の危険をよく知り、その傳染の徑路や媒介をよく心得てゐるならば傳染病患者は著しく減る筈である。然るに日本の首都である東京市などでは四季を通じチブス、赤痢、猩紅熱、ヂフテリー等の恐るべき傳染病が未だ曾て絶えたことがない、のみならず年々歳々其數を増して行く傾向が著しい、文明國の首都として甚しい恥辱と云はねばならぬ。而してこれは要するに市民に衛生上の知識が缺けてゐることに起因してゐるのである。實際少しく衛生上の知識のある者には東京市のやうに傳染病の多いところでは常に不安と脅威とを感ぜずにはゐられない、全然衛生上の知識のないもののみが所謂盲目蛇に怖ぢずて泰然として構へて居ることが出来るのである。斯様な非文明病は吾々の社會から全く驅逐して吾人は今少し

く安心して健康と生命の脅威を受けずに生活したい。それには衛生上の知識の普及が最も肝要である。如何なる消毒よりも、如何なる設備よりも衛生上の知識が傳染病の豫防に最も有効であることを忘れてはならない。此意味に於て國民教育に於ても今少しく衛生知識を課する必要があるか。自己の健康をすすめるその天壽を全うするために必要な知識は吾人にとつて最も大切な知識でなければならぬ。

以下幼兒にとつて最も恐るべき小兒特有の傳染病の二、三に就てその概要を述べて見たい。蓋し幼兒保健上傳染病の豫防は特に大切であるからである。

麻疹。麻疹は幼兒が特に感受性の強い傳染病である、殆んど凡ての小兒が一度は罹るものと云つても敢て過言ではない、しかも病勢が可なり激しく幼兒にとつては決して油斷のならぬ病氣である、昔から麻疹は小兒の命定めと云はれてゐるが現に我が國では年々麻疹で斃れる乳、幼兒が一萬を算してゐる。

麻疹に罹る年齢は二、三歳から五、六歳が最も多い、一度罹れば強い免疫性を得て再感することは殆んどない、又麻疹は四、五ヶ月以下の乳兒には殆んど傳染しない、つまり乳兒は先天的に麻疹に對して免疫性をもつて生れてくるのである。そして成長するにつれこの免疫性は次第に減退して一年近くになると消滅するやうになる。斯様に生後間もない幼弱な乳兒には特に麻疹に對する免疫性が附與されてゐることは生體の保護作用として誠に必要なことと云はねばならぬ。

麻疹は未だその病原體が明かでない。患兒に接近することによつて直接患兒から健康兒に傳染するこ

とが最も多いが、しかし又病原體の附着した品物などからも傳染すること勿論である。通常傳染後十日目に發病する、初めの三、四日は丁度風邪の時のやうに咳嗽や熱發がおもなる症狀である又その外結膜炎を起して眼が赤く腫れることが多い。發病四、五日後に赤いポツ／＼した發疹が全身に現はれる、同時に熱も高くなり氣分なども悪くなつてくる。この發疹は二、三日後には自然に消え、これと共に熱も下つてくる。次で全快する順序であるがいつもかう順調に治る譯ではない。餘病として氣管枝加答兒や肺炎を併發することが少くない。これ等の餘病が併發すると病氣は更に長引き殊に肺炎のためには一命を失ふことが多い。なほ麻疹に就て特に世人の注意を促したいことは麻疹後は小兒の體質が著しく悪くなることである。そして又この機會に乗じて結核の襲來を受けることの多い點である。従來健康であつた小兒が麻疹後に結核に傳染したり又は潜伏結核のある小兒が麻疹後の衰弱に引つゞいて結核の病勢が進行することは決して少くない。それ故麻疹の恢復期には特に注意して病兒の健康を一日も早く恢復させるやうに努めねばならぬ。

昨今東京市内では麻疹が猖獗を極めてゐる。斯様な際には幼稚園や小學校がその媒介となることが多い。麻疹は治癒後も暫くは傳染の危険があるから麻疹患者は全快後も當分休校させて家庭で十分靜養させるやうにしたい、早く登校させることは單に病兒の健康の恢復を遅延させるばかりでなく他の健康者に傳播させる恐れがある。

猩紅熱。猩紅熱は麻疹に稍似た傳染病である。從來も東京には絶えず散在性に發生してゐた、しかし地方には極めて稀であつた。然るに最近一、二年來九州、關西方面には可なりの流行を見るやうになつた、同時に東京地方に於ても著しく増加したやうに思ふ。この形勢から推すと今後益々多くなりはせぬかと危される。

猩紅熱は五六歳から八、九歳の小兒に最も多い。麻疹のやうに一般的の傳染はしないが可なり傳染力は強い。通常突然に三十九度、四十度位に熱發し同時に小兒が咽頭の痛みを訴へる。次で半日か一日の後には極めて細かい赤い發疹が密集して現はれる。この状態は一般に數日間つゞく。次で次第に發疹は消え又熱も追々に下降する、二週日後位にはほゞ平熱になる。丁度この頃から皮膚が剝けてくる、これが又傳染の危険があると考へられてゐる。又此の頃に屢々腎臓炎中耳炎などの餘病を併發することがある。斯様にして順調な経過なれば三四週後に全快する、しかし時には極めて劇烈な症状を呈して數日て死亡することもある。

猩紅熱は恢復後も可なり長い間傳染の危険があるから特に長く隔離する必要がある。又猩紅熱の病原體は極めて抵抗力が強く長く傳染力があるから幼稚園又は學校等に患兒の發生した際には室内の消毒は殊に嚴重なるを要する。

デフテリー。デフテリーも小兒にとつては最も危険な傳染病の一である。一、二歳から六、七歳まで

が最も犯され易い。おもに寒い季節に流行する。咳嗽や談話などに際して病兒から直接に健康兒に傳染することが多いが又物品などを介しても傳染する。症状は初め熱發して氣分が悪くなる次で咽頭の痛みを訴へる、咳嗽はないこともある、大きく口を開かせて咽頭を見ると咽頭は一帶に充血し扁桃腺は腫れてそこに白いものがついてゐる、これを義膜と呼びこゝには無數のデフテリー菌がゐる。斯様に主として咽頭の犯されたのを咽頭デフテリーと云ひ、これが最も多い形である。なほ深く進んで喉頭の犯されたものを喉頭デフテリーと云ふ。この場合は咳嗽が多く、丁度犬の遠吠えのやうな一種特異な咳嗽をするやうになる、又聲が枯れ、呼吸が著しく困難になる、これは最も危険なデフテリーで病勢の進行も極めて早いから一刻も早く醫師の治療を乞ふ必要がある。

百日咳、一年から五、六年の幼兒に最も多い。麻疹に次で傳染力の強い小兒病である。おもに咳嗽によつて患兒から健康兒へ直接に傳染する。症状は初めは風邪の時のやうな普通の咳嗽をしてゐる、熱も殆んどなく、氣分などにも變りはない。一週間も經つと咳嗽は發作的になつて來て百日咳に獨特な性質を帯びてくる。此の發作は病の輕重によつて比較的輕いものと非常に劇烈なものがある、又咳嗽發作の回数も輕いものは一日數回ですむが重いものは數十回にも及ぶことがある。概して發作は夜間に多い。咳嗽發作の始まる前には患兒は何となく不安な状態を呈してくる、續いて烈しく咳き込んでくる、この際殆んど息を吸ふ間もなく短い咳を幾つとなくつゞける、そして其の終りに深く息を内へ引込んで一回の

發作を終ることが多い。この發作時には患兒は顔を赤くし額に冷汗を出して苦悶する。斯様な状態が一ヶ月以上二ヶ月も續くことがある。かうなると病兒の衰弱は著しくなる。次で咳嗽發作も追々に輕快するが全然咳嗽のなくなるまでは數ヶ月を要することが多い。百日咳には又屢々氣管枝肺炎を併發することが多い。そして殊に肺炎を起した場合には病は極めて重篤になる。

百日咳は麻疹以上に小兒の體質を悪くする。そして麻疹と同様に特に結核に對する抵抗力を減退させる。百日咳の經過中に結核に傳染し又は從來の潜伏結核が活動性結核に變ることは決して少くない。それ故百日咳に對しては特に榮養をよくし健康を維持するやうに努力しなければならぬ。

百日咳はその經過が著しく長いため輕患のものや恢復期のものが幼稚園や學校に通ふことが殊に多いこれは是非とも全快するまで休ませるやうにしなければならぬ、他の健康兒への傳染の危険があるのみならず本人も家庭で十分靜養して一日も早く全快するやうに努めるが利益である。

痘痢。痘痢と云ふ病氣は今のところその本態が明かでない。傳染病規則ではこれを法定傳染病としてゐるが實際は必ずしも傳染性でないものも痘痢として診定される場合が多いやうに思ふ。おもに四、五、六歳の幼兒が犯される。乳兒には痘痢と云ふ病氣は殆んどない、又學齡期以後の小兒には著しく少い。梅雨期から初秋にかけて最も多いが秋冬の候にも絶無ではない。原因は食物の不攝生によることが多いやうに思はれる。症状は極めて急激で今まで健康であつた幼兒が急に發熱し、嘔吐や下痢を起してくる

そして非常に渴を訴へるのが多い、次で多くはウト／＼眠り込む即ち嗜眠状態にある。下痢は初めは不消化物であるが後には血液を混じた粘液や膿様のものに變る、回数は一晝夜四、五回多くも十回位である。發病後半日か一日で症状は著しく險惡になり精神は朦朧として來て同時に屢々痙攣を起してくる刻々容態は惡化し、一兩日の内に死亡するのが多い。

疫痢はその經過が極めて迅速で死亡率も極めて多いから常にこれを未然に防ぐやうにしなければならぬ。殊に夏季は幼児の食物に注意し不良な果物や不消化物の過食を戒めねばならぬ。

以上は幼児にとつて最も恐るべき小兒傳染病の數種を挙げたのであるが、尙幼兒を犯す傳染病として流行性耳下腺炎、水痘、風疹等があるが、これ等は比較的危險の少い病氣であるから説明を省略する。なほ此外一般傳染病である赤痢やチブスも幼兒には決して少くない。その他慢性傳染病たる結核の如きも幼兒期に傳染することが最も多いことを忘れてはならぬ。

斯様に觀來る時に幼兒の保健上傳染病を避けることが如何に重要であるかと判る。幼兒をもつ母親は勿論幼兒の保育に當るものは幼兒を襲ふ傳染病に就ては特に十分の知識が必要である。そしてあの無邪氣な危險を知らない幼兒を保護してやらねばならぬ。